

99. 継承 ～物を通じて、者を残す～

0910920043 往下雄二
指導教員 市川尚樹 准教授

1. 背景・目的

「古民家再生プロジェクト」では“茅葺き住居“再生の際に大量の廃材が出る。この廃材がもったいないので、何かに使えないかと思ったのがきっかけである。また、茅葺き住居は現在では、法律上建造不可能で、現存するものしかない貴重な建築である。

本研究は、この廃材を家具として有効活用すると共に、歴史ある民家の廃材を利用することにより、使う人に傷や汚れ虫食いを感してもらおう。これを通じて、古民家の貴重さや雰囲気、良さを知ってもらい保存活動への協力者を増やすことを目的とする。

2. 計画空間概要

「古民家再生プロジェクト」での活動場所で、伝統的な茅葺き屋根の日本民家。間取りは改修前、3LDK。改修後、2LDK。

活動当初、床や柱が腐っており、扉の開閉もままならなかった。使用するには改修が必要不可欠でありこの際、大量の廃材が出る。以前は、学合宿場として疲れ割れていた。



写真 1 廃材

3. コンセプト「継承」

建築材料としては使えない廃材をヴィンテージ材と称し、家具という新しい形で有効活用する。古民家で使われていたものを材料として用いることで、材料がたどって来た歴史を使用者に身を持って感してもらおう。それによって、工夫すれば古いものでも蘇る事ができ、長く使えるということを伝える。保存活動に貢献してもらえ人がひとりでも増えてくれることを願いカタチにする。

4. 椅子

4. 1 素材

古民家を再生する際に出た木材。大別すると、古民家に使用されていた古い木材と再生の際に使用した新しい木材の2つである。

古い木材は、床材、柱に使われていた杉、ケヤキなど。大半のものは、シロアリによって侵食されており、空洞が無数に存在する。そのため強度が弱い。新しい木材は、床材に使われた材料の木端。材木は杉。

表 1 廃材一覧

床材	(厚さ 1 cm、長さ 1 m 以上)
板	(厚さ 3 cm～5 cm、長さ 1 m 以上)
柱	(厚さ 5 cm～10 cm、長さ 1 m 以上)
新材の木端	(厚さ 1 cm、長さ 1 m 以上)

4. 2 構造

廃材をミルフィーユのように重ね合わせ必要な厚さにする。そして最終の形を削り出し、最後に研磨する。

シロアリに侵食されたもろい廃材を、接着剤で重ね合わせることで強度を確保した。また、切り口で新旧、様々な素材の廃材を用いていることが確認できる。これは、新旧の材料で改修された現在の古民家をモチーフにした。

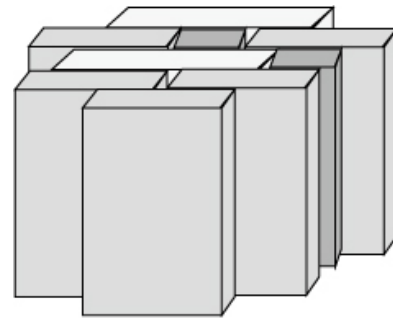


図 1 構造 (椅子)

4. 3 デザイン

古民家をイメージした。古民家の現在の形は、伝統的な日本家屋として使われた後、改修され現代で使えるようになってきている。これは絶えず人が関わっていたからこそ維持できている。そしてこれからは途絶えることなく、維持していかなければならない。そこで、“この人と古民家”の関係を、一本の線が途切れることなく続く“円”に倣いこれからは途切れずに続いてほしいという願いを込めた。座面のくぼみは、住みにくい家でも工夫すれば、

人間に合わせることができ、使いやすくなるということ表現している。さらに、全体的に丸みを帯びた形にし、古民家の懐かしく温かな印象にした。切り口の様々な木材からは、過去の記憶が伝わるようにした。



写真 2 椅子

5. 照明

5. 1 素材

椅子同様、古民家再生の際に出た廃材を使用。長さがあるものを選択。ほとんどのものがシロアリによって浸食されている。切断面を見ると虫食いの様子がよくわかる。

5. 2 構造

キャンプファイヤーの要領で、長方形の材料を縦と横に何層も重ねる。その内側に電球を配置することで、外側の材料を介して外に光が漏れる。これによって、外側のヴィンテージ材の雰囲気がさらに、際立ち簡単に雰囲気を感じる事ができる。

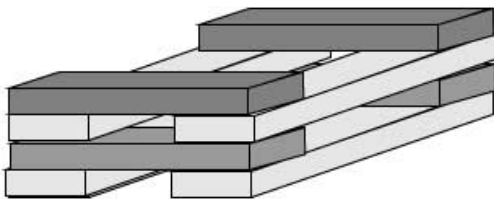


図 2 構造 (照明)

5. 3 デザイン

形や構造は極力シンプルにすることで、廃材の存在を邪魔することなく、本来の味を感じることができる。

直方体にすることで、重厚感を出し、古民家の歴史の長さとも現代でも使い続けられる力強さを表現している。

廃材に対して光を斜めに当てることにより、材料の傷、汚れ、虫食いがより際立つようになった。さらに、光源が直接目に届かないようにすることで、照明を見たときのまぶしさをなくした。これらにより、材料の質感を鮮明にかつ、美しく映すことができ、古民家の歴史を誰でも簡単に感じる事ができるようにした。

照明下部は直接光が出るようにした。光の出方が、間接的と直接的な部分が備わることで、メリハリが生まれ

さらに美しく見えるようになった。同時に、照明下の明るさを十分にとることができた。古民家の歴史ある室内と私たちの未来を優しく照らしてくれるだろう。



写真 3 照明

6. まとめ

廃材に長い時間をかけて出来た傷や汚れ、虫食いは、家具となっても雰囲気となって表れ、その雰囲気は薄れることが無い。家具を使う人は、その雰囲気からヴィンテージ材がたどってきた歴史をアルバムのように感じることができる。自然にできたこれらの味は、人工的な加工や新材では決して感じる事はできないだろう。

本来捨てられるはずだった廃材が手を加えることで家具として蘇り、これからも使えるようになった。廃材の有効活用と共に使う人が身近に使える家具として蘇らせた。よって、古民家の良さを簡単に伝える事ができたのではないかと思う。また、いろいろな素材の廃材をひとつにする事で、廃材の短所でありそうな汚れなどを味として生かせることが出来た。

貴重な古民家の再生・維持・保存は人の手が不可欠だ。建物本体を改修するのはもちろんだが、本論のような違った形で手助けすることもできる。他にもたくさんする方法があるだろう。本制作がきっかけになってくれれば良い。



写真 4 改修後配置写真